
月の見えぬ森

ハラハラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の見えぬ森

【Nコード】

N3763H

【作者名】

ハラハラ

【あらすじ】

嫌な夢をみた…何かに追いかけていて……だけど、俺の手には、温かいぬくもりがあった…。

月明かりの下で（前書き）

初めましてハラハラと申します。

とんでもない素人で、今回が初投稿です！！
本文も至らない部分が多くあると思いますが、楽しんで読んで頂けたら本望です！！

それでは、良かったらご覧ください。

月明かりの下で

月も見えない深い森の中……俺たちはただひたすら走っていた……

息が苦しい……一体何処まで走るのだろう……。

「アーサー急いで!!」

そいつは、俺の手を引きながら、そう叫んだ……訳がわからず後ろを振り向いた瞬間……

「アーサー！起きるんだぞ！」

俺は、その声を聞いてバツと飛び起きた

「あっああ……おはようアル」

俺を起こした声の持ち主アルフレッド・F・ジョーンズは、心配し

たような顔しながら俺の顔を覗き込んできた、

「アーサー……君、少し顔色が悪くないかい？」

「いついや大丈夫だ……そうだ腹減っただろ？今日は俺が作ってやるから、座って待つてろよ。」

そう言う……アルは……

「君の作る不味い料理より、ハンバーガーが食べたいんだぞ！！」

俺は、一体何処で育て方を間違えたんだろう？……昔は、ふわふわして……それでいて天使と見間違う程可愛かったのにもしも昔に戻るなら、俺は、今すぐ育て直したい！

「うるせえ！少しは痩せる努力しろよ！メタボ野郎！！」

「なっ！？なら、アーサー君は貧相過ぎじゃないかい？筋肉だってないしさ！！」

「てめえ……！！もういいお前には二度とメシ作ってやらねえからな！！」

「ああ……其れは有難いんだぞ……寧ろ、三食ハンバーガーのほうがいいが、アーサーの料理より健康にいいんじゃないかい？だって君の作るメシはいつも丸焦げじゃないか……！！」

「うるせえよ！ばあか！」

「バァン！！」

俺はアルの言葉を聞いて何も言い返せなくて、自室のドアを強く閉めた……

「何だよ！くそ！此れでも少しは作るの上手くなったとおもったのに……」

俺のメシは、けして美味しくはない、近所に住むフランス人のフランス人にスコーンを焼いてやったら……

「坊っちゃん……これはないよ……お兄さんが手取り足取り腰取り教えてあげ……ゴバァァー！！」

……最後の効果音は忘れてくれ……多分、大したことはない

とにかく、俺のメシは不味いのはわかった……フランスは変態だが、料理はとっても美味い……べつ、別に悔しいなんて思っていないだからな！！本当だからな！！

「ピンポーン……」

俺は呼び鈴が鳴ったので玄関に駆け足で向かった……だいたい、来

客が誰であるかわかったので誰かも聞かず玄関のドアを開けた……
其処には、小柄で黒い髪色をした青年がいた。

「こんにちは、カークランドさん。ジョーンズさんにゲームを貸しに来たんですけど……ジョーンズさんいらっしゃいますか？」

「ああ、あいつなら自分の部屋にいるよ。よかったらあがっていいかい？」

この小柄で綺麗な青年は今日も優しげに微笑む……俺はコッソリこの青年、本田菊に憧れている、だって俺と違っておしとやかだし、素直だし……

「あつ、では……邪魔します。」

ちよつとして、アルが部屋からひよこつと顔出してきた。

「おー！菊遅かったじゃないかー！！」

「すみません、ちよつとシャナタンに萌えて……あつ……いえ何でもありません！」

「H A H A H A H A！菊はたまによく解らないことを言っな！」

こいつ、菊の前では……いい笑顔するよな……俺の前では憎まれ口しか、たたかないのに……しばらくしてアルは菊を部屋に案内して行った、俺には目もくれず……

俺はいつの間にか寝ていたのか時計の針は、深夜十時を指していた、

「……あれ？いつベッドに入ったんだ？」

確か俺は……洗濯物を取り込んで、そのままりビングで洗濯物をたたんでた筈……

「あつ！そつだ洗濯物！！」

俺は洗濯物がどうなったのかが、気になってすぐにリビングに向かった、其処には……アルフレッドがいた、

「何で、アルが？」

いつもなら、この時間は徹夜でゲームをやってるか、寝てる筈……やっぱり今日の事で話でもあるのだろうか……

「あつ、アル？」

アルは、ソファアに座って黙っているだけで俺を見ようとしな

……俺たちずっとこのままなのかと思うと瞳から涙が流れてきた……
…其れでも俺はアルに話しかけ続けた……

「……アル……あのな……」

「「スー…スー」」

……？この音は…寝息？まさか！…と思ってアルの顔を覗き込んで
視ると、アルは幸せそうな顔をして眠っていた……

「……何だよ……驚かせやがって……」

俺はアルが、無視している訳ではなかったことに…安堵のため息を
ついた……

しかし、何でアルはリビングに居るのだろう……ふっとアルの周り
を見てみると丁寧にたたまれている洗濯物が無数にあった……

「此れ……もしかして、全部アルが？」

いつもなら……

「「トニーがやってくれると思うからから、そこら辺に置いてく」と

いいよ。」「

……俺が甘やかして育てたせいかな……人任せにする癖がついていたのに……ちゃんと成長してるんだなと思った。

俺は感謝の気持ちを込めてアルを抱き締めた……喧嘩をしていた事など……とうに忘れて……

「アル……有り難うな……」

優しい時間が流れていく……そろそろ離れようとしたら……片腕をぐいっと引つ張られた、

「わあっ！？ちよっ！？」

「君……人の寝込みを襲うの好きなのかい？」

「なっ！？ちげえよ！！」

顔が近い……後もう少しで口付けを交わすところだった……

「好きじゃないなら、なんなんだい？……ところでアーサー……君また顔色が悪いじゃないか！寝てなよ、其れとも寝れないのかい？」

もし、俺が素直に言える人間なら……顔が真っ赤なのはお前のせいだ！……と叫んでやりたい……まっ俺は英国紳士だからどちらにせよ

叫ばないけどな！！

「…べつ別に…寝れねえわけじゃねえよ……」

ほら、俺はまた可愛くもないことを言う……もう少し言い方がある筈なのに…

「そつ、其れに俺の事はいいから、お前はさつさと寝ろよ……」

だけど、どうしても…俺は素直になれない……いつだって、素直になろうと努力はしてきたつもりだったが、結果的に相手を傷つける事しか、出来なかった気がする……だから、優し過ぎる菊は、実は…無理して俺につきあってくれているのではないのか？と不安な気持ちになったりする……それに、いまだってアルに素直になれていない……こんな自分では、いずれ誰も傍には居てくれなくなる。そう、悩み始めていたら、いつの間にか……俺は、アルフレッドに後ろから抱き締められていた……。

「……アル？……」

俺は、内心かなり吃驚していた、まさか抱き締められるとは思ってなくて、アルの腕を握っている俺の手は、かすかに震えていた……

「アーサー……今朝はご免なんだぞ……」

アルは、確かにそう言った俺はつい、泣き出してしまいそうになった……そして……

「アル……そっその…俺も悪かった……ご免な……」

その時、俺はアルに顔をみられたくなくて…アルの腕の中に顔を埋めた。

「アーサー……」

俺たちは静けさの中、優しい時間に浸っていった……月明かりの下で……

刹那の一時

年月は、過ぎて行き……もうすぐで、クリスマスが来ようしていた。

町は、夜だというのに全体的に輝いていて周りを見渡すと幸せそうな顔した恋人たちだらけだった……

俺は、というと今日の夕飯の材料を買い終えた後だ、なんとアルが……

「今日は、君の料理が食べたいんだぞ!!」

と言うので、俺は……

「しっ、しょうがねえから、作ってやるよ!」

つと憎らしい事を言ってしまったが、心の底ではとても嬉しかった。アルが、君の料理が食べたいなんて最後にいったのは、何年も前だ……だからこそ今日は、とびつきり美味しい料理を使ってやろうと思う。

家に着いた俺は、早速料理作りに取り掛かった……

「えーと、玉ねぎ、にんじん、じゃがいも……あっ肉もだ」

それらを、一口大に切って炒める。

一時間経った

「さあゝ出来たぞ！これでアルも……」

つと言いかけたところに、チャイムが鳴った……俺は、駆け足で玄関に向かった

「はい、どちら様ですか？」

「あー？アーサー？俺だよ開けてほしいんだぞ！」

「ああ、アルか今開ける」

「「ガチャ」」

「アーサー、ただいまなんだぞ！」

「おっおう、おかえり…アル…／／／」

未だに、アルの笑顔には慣れない……よく解らないけど……胸の辺りが苦しくなる、そう考え事をしていると……

「そつえば、アーサー晩御飯は？」

「ああ、もう出来てるぞ」

「本当かい！？じゃあ、早くリビングに行こうなんだぞ！！」

「…ああ」

正直、今回作った料理は上手く出来たと思う……アレならきっとアルも喜んで食べてくれると思う……まあ、きつとだけだな……。

少しばかり、心配しながらリビングに続く廊下を歩いた。

「そつえば、君何を作ったんだい？」

「……其れは、見てからのお楽しみだ」

「ええゝなんでだい！？」

「とにかく！今は秘密だ！！」

アルは、リビングに着くと、いつもご飯を食べるテーブルに座った。

「「まだかい？俺、もうお腹ペコペコなんだぞ」」と言ってるアルが可愛くてつい、笑みをこぼしながらも、素早く料理を皿に移した。

「ほら、出来たぞ！べっ、別にお前の為なんかじゃないんだからな！！」

可愛くない事を言いながら、作った料理を手渡した。

「おおー！！アーサーが作った料理で、初めてまともな料理を見たぞー！！」

「なっ！？……まあ、いいか……早く食べようぜ？今回作った料理は上手く出来たと思うしな。」

「おおー！！」

俺が、作った料理はカレーだ。

この前、菊にお願いして作り方を教わったのだ、菊の教え方はとても丁寧で、料理が下手な俺には解りやすかった。

「どうだ？美味しいか？」

でも、味見はしていなかった為、少し心配しながらアルに聞いてみた……

「凄く美味いんだぞ！！コレ本当に君が作ったのかい？って位に！！」

「本当か！？……良かった〜あつても、ちゃんと俺が作ったんだからな！！」

「本当か〜い？君の事だから、菊にでも頼んだかと思ったぞ」

アルは、いつも菊の話する……確かに、菊は優しく一緒にいるだけで癒される……けどなんだろう。アルが、菊の話をすると胸の中で何かが蠢いている気がする……。

「そんなわけないだろ、今回のカレーは、ちゃんと俺が作ったんだからな！！でも確かに、菊に教わったな！」

「H A H A H A ! ! 菊は、やっぱり凄い奴なんだぞ ! ! なんて
ってアーサーの料理をこんなに美味しくしたんだからな ! ! 」

「……………ああ、そうだな」

今、ちゃんと笑えたか？ へんな顔しなかったよな……………？

「ところで、アーサー……………クリスマスイブ暇かい？」

食事を終え二人でソファーに座った瞬間いきなりの事だったので、
一瞬吃驚したいや、クリスマスイブは暇なんだけど……………アルが、こ
んなこと聞いてくるのが意外で……………。

「ああ、今のところ暇だな……………」

「本当かい ! ! ？ じゃあ、今年のクリスマスイブ二人で何処かに行か
ないかい？」

「ああ……………でもいいのか？ お前菊とかと、クリスマス過ごしたほう
が楽しいんじゃないか？」

「今年は、アーサーとクリスマス過ごしたいんだ……………駄目かい？」

「……べつ別に、駄目じゃねえよ……俺もお前とクリスマス……過
ごしたいし……」

「アーサー……有難う……」

アルに、正面から抱き締められた……正直、アルに抱き締められる
のは嫌じゃない……でも、時々不安になる……アルに抱いている気
持ちがバレてしまわないか……いつか、この温もりが消えてしまう
のではないかと……アルが、何かに気づいたのか、窓のほうに指を
指した。

「……雪」

アルが、指を指したほうには雪が降っていた。

「アーサー……綺麗だね」

「ああ……綺麗だな……」

其れは、儚い雪のような想い……高い天から降って来ても……やが
ては、小さな雫へと変わり……消えてゆく……刹那の一時を俺らは
過ごす……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3763h/>

月の見えぬ森

2010年10月10日11時12分発行